

「羽倉さんの思い出：別世界の人」

桑山哲郎

羽倉弘之様は、2016年10月30日逝去されました。ご存命でしたらこの2月22日に満71歳を迎えるはずでした。早すぎる死が悼まれます。私達3Dフォーラムの関係者がこれを知ったのは、11月26日、奥様と電話でお話したことによります。事務局代行として、この関連の事情をまずご報告いたします。

羽倉さんから「3Dフォーラムの事務局業務を一時的に代行して欲しい。」との連絡があったのは、2011年11月でした。大腸癌で入院、手術をするとのことで、3Dフォーラムの会員宛に会誌や代表幹事選定の書類を発送する業務を一時的に分担しました。1か月ほど経ちお会いする機会がありました。健康状態が心配だったのですが、手術の影響はほとんどみられず、安心しました。

その後、髪が白くなったのが多少目立つほかは、外見上特別に健康状態変化は分からなかったのですが、2016年6月には、3週間近く羽倉さんと全く連絡が取れない状況が生じました。6月に予定していた総会を7月30日に延期し、直前に長野に転居されていた羽倉さんをお待ちしたのですが、健康上不安があるとのことで、欠席されました。今後の3Dフォーラムの事務処理について、幹事が業務を分担する打合せのため、8月11日に佐藤誠3Dフォーラム代表と長野を訪問、お会いしたのが最後になりました。ご自宅では、3Dフォーラムの事務局業務に最後まで取り組まれていました。体が動かなるまで、3Dフォーラムの活動に熱心に取り組まれていたことを、皆様にご報告いたします。

最後に作業中であった、3Dフォーラムの事務処理を再立ち上げのため、2016年12月6日と2017年3月2日に羽倉家を訪問し、必要な文書とご本人の遺言に従った3D映像関連グッズを戴いて帰りました。

■別世界の人

さて、本題の「羽倉さんの思い出：別世界の人」についてご報告することにいたします。羽倉さんとのやり取りを思い出すと、あまりにも沢山の事柄が浮かんで来て收拾がつきません。一言での人物評と、2枚の写真にだけ絞ってご報告することにいたします。

1983年頃、羽倉さんがホログラフィック・ディスプレイ研究会の研究会に参加し始めて、あまり時間がたっていない頃だったと思います。「3D映像についての本を執筆しようと考えている。あなたの3D映像についての考えをお話し下さい。」という要望で、1時間以上話し合いました。3Dについて私は「三次元空間を認識し、三次元空間の中で正しく行動できることが基本で、次に三次元物体を頭の中で操作できるようになり、映像は補助的な手段だ。」と自分の考えを話しました。話し合いは和やかには進んだのですが共通点は少なく、「羽倉という人物は、別世界の人、私とは違う世界モデルに従っている人だ。」と考えました。

付き合い始めた最初から「別世界の人だ」と羽倉さんを位置付けたことが、亡くなるまで協力関係を続けることのできた理由だと思います。あるとき、1964年頃の学習参考書「物理精義」を優れたステレオ写真の技術解説書としてコラムで取り上げたことがありました。羽倉さんがこの情報を紹介するのに発行年記述が無く、単に「物理精義」とだけ記述しているので「発行年を明記しなければ読者は何のことか分からない」と指摘したのですが、何の反応も無く、そのままになりました。またあるとき、年に4回発行している「3D映像」に続けて同じ本の写真が掲載されたことがありました。私は「発行時点で興味があると思った本は、毎号連続して1年間掲載するのですか？」と質問したところ「その通りです」との返事でした。また、ご自身の著作や他の著者の担当本を記載するのに、出版社の名前を書かない、発行年にもほとんど注意を払わない点は一貫した姿勢でした。

この様な、極端な表現では「普通の方とは違う世界モデル」を持っている方であるという事は、次のエピソードからも知ることができます。あるとき、空中に映像を表示する技術について、用語としては間違った解説を羽倉さんが書かれているのを見つけ、話をしました。「どんな事典や一般的な国語辞典にも『実像』の定義は掲載されている。結像光学系の最終面よりも手前の空中に生じ、スクリーンを置くと像を見ることができ、感光材料やセンサーを置くことで像として利用できる。」と説明したところ『『実像』に定義がある事は全く知らなかった。』という返答でした。それ以来、会話に当たり用語を同じ「意味」で使用しているのか、注意するようになりました。

羽倉さんは、独自の世界モデルで世間や社会、技術を見ているという事があまり理解されず、ときには誤解を生んだのではないかと思います。

■記念写真

自宅の資料を最近整理したところ、いくつか思い出の品が出てきました。1番目は、羽倉さんと一緒に写っている記念写真です。1982年10月と撮影日時を推測しているのですが、千葉大学で開催された、ホログラフィック・ディスプレイ研究会の際に撮影されたものです。羽倉さんが初めて研究会に出席された回だと思います。何を意図しているのか、ほとんど話が通じなかったのが初対面の印象です。



左上から 羽倉弘之 氏、石川洵 氏、桑山【一部を拡大】

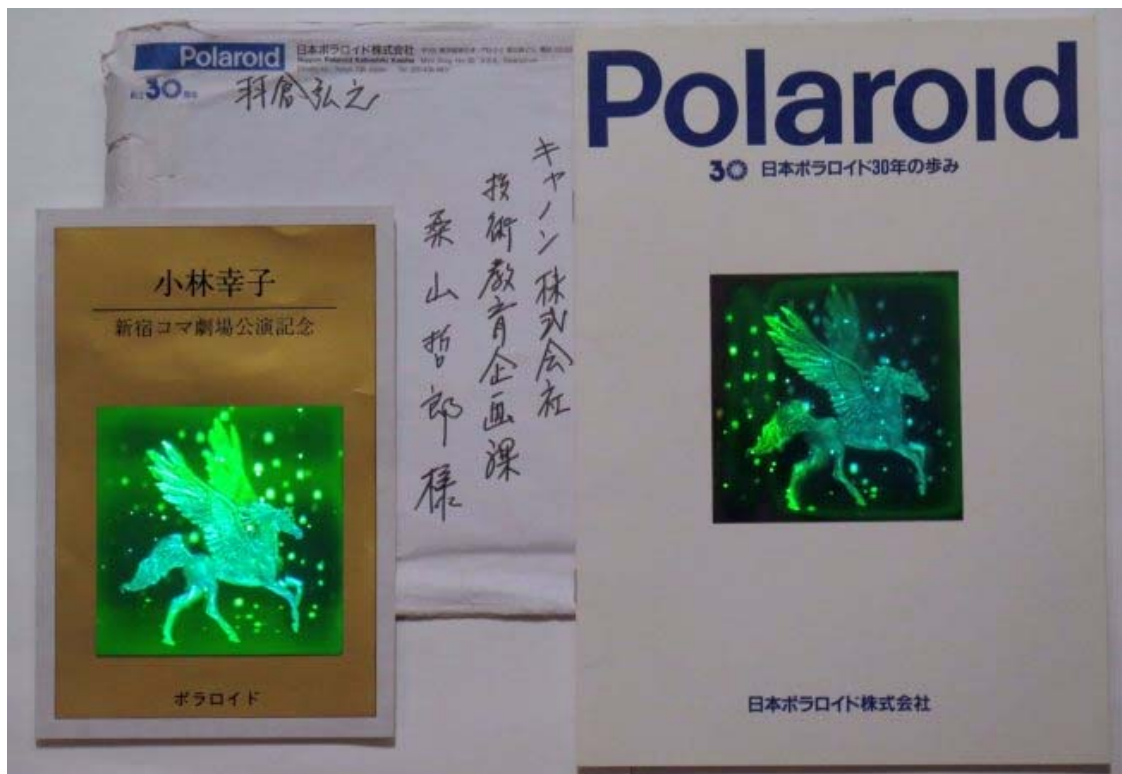


ホログラフィック・ディスプレイ研究会の記念写真（1982年10月?）

■ホログラムが貼られたパンフレット

その後は、3D フォーラム(三次元映像のフォーラム)の設立準備の会議で、話し合う機会が増えました。記念すべき思い出の品物をご紹介しますことにいたします。

写真は、羽倉さんから郵送された「日本ポラロイド 30 年の歩み」のパンフレットとこれに関連する資料です。当時の私の勤務先に届いたのは 1990 年の 1 月で、表紙にポラロイド社のフォトポリマーの感光材料に記録されたペガサスの図柄のホログラムが貼られています。パンフレットからは、科学万博つくば '85 のポラロイド社の展示と、ホログラムの前に立つベントン博士の姿を見ることができます。また左に置いてあるのは、歌手 小林幸子 新宿コマ劇場公演記念のパンフレットです。1993 年の大晦日、NHK 紅白歌合戦に出演した 小林幸子 の衣装に大量のポラロイド性のホログラムが貼り付けられ、ホログラフィ関係者の間では話題になりました。羽倉さんからのお知らせを当時、どのように受け取ったのか記憶はあいまいなのですが、研究会の場で、口頭で伝えられたのだと思います。当時羽倉さんはポラロイド社のホログラムについて、熱心な広報活動を行っていて、会うたびにホログラムを戴いていたと思います。



「ポラロイド 30 年の歩み」と「小林幸子 新宿コマ劇場公演記念」のパンフレット

この先書き続けると切りが無いので、亡くなられた後に、ご自宅を訪問したときのご報告で終えたいと思います。部屋に入り、うれしい感情が顔一杯にあふれている遺影と対面しました。初孫を自宅に迎え、大喜びの様子を撮影した写真とのことでした。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

(2017 年 3 月 20 日 記)